

英語教育に於ける異文化コミュニケーションの効果

高 取 康 之

1. はじめに

わが国では、これまで中学校から本格的に英語教育を行ってきた。昨今英語教育の見直しが計られ、実用的な英語教育を目指し、英語教員の補助として、多くのネイティブ・スピーカーが配置されている。これはこれまでの講読や文法中心の教育から話すことや聴くことを重視する教育への方向転換の一つであろう。これもますます国際化しつつある英語に対する社会の要望を配慮したものではないだろうか。

大学に於ける英語教育にも、社会の変化が大きく影響していることは言うまでもない。社会が求めている英語とは実践的なものであり、資格偏重の傾向がある。結果として、社会が要求している英語の能力とは、実用英語検定や、TOEIC等の点数で英語力が判断出来る客観的テストに偏っている。一方、日本の大学が今まで行ってきた英語教育は、現在の社会で求められている客観的な英語教育とは対局に位置する教養を身につけさせる英語教育であった。しかし、日本の出生率は、若者の晩婚化傾向と連動し低下の一途を辿っている。その結果、大学の定員と大学進学希望者の数が、近い将来同数になると見られている。まさに、大学全入の時代が直ぐそこに迫っているのである。自ずと各大学も生き残りを賭け学生から支持を得るために様々な方策を打ち出している。新学部の設置、カリキュラムの変更を筆頭になりふりかまわぬ人集めに躍起になっている。折しも来年度から国立大学が独立行政法人化されることとなり、私立大学を含む激しい競争の時代に突入する事となる。これら社会状況や少子化及び大学間の生き残り競争の激化などが、英語教育にも大きな影を落としている。長期間に及ぶ雇用不安により、かつてのように大学を卒業すれば自動的に就職出来ると言う時代は終焉を迎え、多くの大卒の学生が就職出来ずにいる。かれらが求めている英語力は教養の為のものではなく、社会が求めている

客観的な英語力である。それを物語る様に、英語関連の資格を取る為に大学へ通いながら、資格習得の為に専門学校に通う学生達も珍しいことではない。実際大学によっては、資格取得の為に講座を設置したり又はそうした講座をカリキュラムに組み込んでいる大学さえある。しかし、本来は教養を付け、専門教育を深める為に人々は大学に行くのであり、資格を習得する為にだけ大学に行くのではない。あまりにも資格偏重の教育に傾けば、大学は大学たる存在意義を失うことになりはしないだろうか。資格を取るだけであれば、専門学校でことが足りるのではなかろうか。

これらの本質的な問題以外にも、大学は大きな問題を抱えている。少子化により、年々学生のレベルが低下し、より質の高い学生を集めようと奔走している。特に英語レベルの低下は著しい。先ほども述べた様に、中学校から英語の補助教員と接しているにも関わらず、その成果が表れているようには感じられないのである。文部科学省では小学校から英語教育を始めようと計画しているが、おそらく大きな成果が上がることはないであろう。日本の英語教育が受験対策の為に行われることがなくならない限り、何歳から英語教育を行っても、大きな成果は期待出来ないと思われる。

学生達に英語は好きかと聞くと、多くの学生が苦手であるとか、嫌いであると答える者が非常に多く見受けられる。無論学部によって違いはあるだろうが、英語嫌いの学生が数多く存在することは否定できない。そして、多くの英語嫌いの学生が、受験を境に嫌いになったと口を揃えて言うのには驚きを禁じ得ない。このような現実にあふれて、これからの英語教育に必要なことは、英語を学習するモチベーションが低い学生達をいかにしてやる気を起こさせるかどうかではなかろうか。そこで本稿では、異文化コミュニケーションと英語教育との融合の可能性を探り、英語習得に関してより高い動機付けを与える方策を論じてみることにする。ここでは特にライティング、スピーキング、リスニングそしてリーディングに焦点を絞って論述する。

2. 異文化コミュニケーション、ライティングへの応用性

今まで日本で行われてきた英語教育に於けるライティング指導の主流は、和文英訳が中心であった。長い文章を書くことを避け、短い文を書かせることが主眼に置かれていた。つまり、短い文章を日本語から英語に変換する作業をライティングと称しているのである。

本来ライティングは自分の考えを英語で表現することであると考え、短い文を単発的に書かせても、まとまった長い文章を書けるようにはならないと思われる。文章をつなげて自分の考えをまとめることは、母国語であっても決して容易なことではない。ましてや、母国語でない言語をつながりのない短文のみで書かせているのは、大きな成果が期待出来ないことは言うまでもあるまい。日本語から外国語への変換は容易なことではなく、辞書を片手に日本語から英語、英語から日本語へとかなり高い言語能力が求められる。まとまった英語の文章を書くには、きちっとしたプロセスを踏まなければ容易なことではない。そこで重要なのが、ライティングのプロセスの本質である。

現在ライティングの教授法には、二つのメジャーな考え方があり、論争の的になっている。ここで、それぞれの教授法の考え方の趣旨を述べて行くことにする。

プロダクト・オリエント・アプローチは出来上がった物、明瞭性、そしてミスのない教材の使用に焦点を置いている。具体的にはプロダクト・オリエントとは、教師やテキストから与えられた教材を学習者がまねたり、写したり、変換する技能に焦点を当てた教授法である。一方プロセス・アプローチは、ステップを踏み何度も書き直して完成させることに焦点を置いている。プロセス・アプローチが提唱していることは、完璧な教材など存在しないと言う現実を受け入れることである。書くことを通して、完璧に近づくべく反省し、討論し、そして、教材を見直すことである (David Nunan, 272)。

自分以外の人間は少なからず異なった文化を持っているという観点に立つと、教師から見て学生とは世代や育ってきた環境も大きく異なり、まさに異文化と言うことになる。

これまでの日本的価値観は、個人よりも集団に於ける価値観を優先させ、権威にひれ伏し、特定の間人間関係を大切にしている傾向があった。個人の意見は抑えられ、集団の意見がまかり通る為にスタンド・プレーは敬遠され集団の調和を計る人々が尊重される。何か意見を述べるにしても、周りの意見と歩調を合わせなければたちまちスタンド・プレーヤーと見なされる傾向があった。(石井敏 51)

しかし、これが現在の若い世代に果たしてあてはまるであろうか。日本人は、元来行儀作法に対して、幼少の頃から厳しく躾けられてきた。例えば、アメリカ人は物を食べながら路上を歩いたり、道ばたに座り込むことに特に違和感を感じない。

ところが、日本人からしてみれば、これはかなりマナー違反と見なされる。だが、最近の日本の若者は、コンビニの外に座り込み物を食べたり、電車の中で化粧をしたり、かつての日本人の価値観から見れば明らかにマナー違反の行為を躊躇なく行う者が見受けられる。社会の状況や食生活の欧米化が大きく影響しているのだろうが、かつての我慢強い日本人が、切れやすい日本人へと変貌していることも昨今頻発する事件を見れば疑う余地もあるまい。今や日本人の行動規範や価値観が、変わりつつあるのではなかろうか。

そこで、ライティング教材を選定するにあたり、かれらの文化を知る必要があるのではなかろうか。今までの日本人の価値観を基に選定することは、彼らの文化にそぐわない物になるのではなかろうか。正しい教授法を選択し実践することは、重要な要素ではあるが、相手（異文化を持つ者）のことを知らずに安易に自分の価値観を押し付けても、モチベーションを上げることは難しいと思われる。プロダクト・オリエントに焦点を置いてライティングの教授法を実践するにしても、プロセス・アプローチを焦点に置いてライティングを実践するにしても、教授する相手のモチベーションを上げて行けるような教材を選定しなければ、やはり効果的に教授することは出来ないのではなかろうか。相手の異文化背景をしっかりと認識し、どのような教材が適正かを考えることにより、高い動機付けが可能になると思われる。英語教育でもっとも大切なことは、学生の学習への動機付けである。学生のニーズを探り、かれらの学習意欲をいかにして高めるかを常に念頭に置かなければならない。

3. 異文化コミュニケーション、スピーキングとリスニングへの応用性

おそらく多くの日本人学生が最も苦手とする分野が、英語をしゃべること、聴くこと、すなわち、スピーキングとリスニングではなかろうか。これら二つの分野が、最も受験の為の英語教育からネガティブな影響を受けていることは否定できない。

12歳から英語教育を受け大学に入学するまでに、たいていの学生は何らかの形で英語に関連した科目を受講するが、非常に多くの学生がスピーキングとリスニングが最も苦手であると答える。受験英語は、文法と読解に特化しているので、どうしてもスピーキングとリスニングは学校教育の中で、蔑ろにされる傾向がある。いくらネイティブ・スピーカーの補助教員が学校に常駐していようが、受験英語に於けるスピーキングとリスニングの比重が増さない限り、このようにオーラル・イングリッシュが苦手な学生が減ることは期待出来ない。諸外国の人々は、日本人は英文法

が良く出来ると評価するむきがあるが、その裏返しはオーラル・イングリッシュが出来ないと言うことであろう。

英語を話すために必要と考えられる技能は数多くあるが、大別するとOral skill, Production skill, Interaction skillの3つに分類することが出来る。(Bygate, 1987). とりわけ、日本人学習者にとって、Production skill, Interaction skillの習得は、コミュニケーションが話し手と聞き手によるキャッチ・ボールと言う性格を帯びている以上、どうしても習得しなければならない技能である。¹ (石山赤北、 72)

1. Oral skill

これは、相手が英語を話かけてきた時、相手の言った内容を認知及び理解し、相手からの問いかけに対して反応するスキルである。このスキルには英語を正しく発音し、正しい語順で文章を作ることが求められるが、相手の問いかけに反応する迄の時間は考慮されてない。よって、英会話を成立させる為にはこれ以外のスキルが必要不可欠である。(石山赤北、 72-74)

2. Production skill

会話をする場合我々は、常に問いかけから反応までの時間の制約を意識している。その制約された時間の中で、何をどのように話すかを決定している。このように実践的なコミュニケーションの中で使われるスキルが、Production skillである。そして、このスキルは実際に発話するときに、発話行為を促進するスキルと時間の制約等のプレッシャーに対処するスキルに分類される。(石山赤北、 72-74)

3. Interaction skill

自分の言いたいことを相手に伝えることが、コミュニケーションを行う上で重要な要素であるが、それは、母国語であつても容易なことではない。Interaction skill はRoutineとNegotiation skillから成り立っており、コミュニケーションの根幹となる。Routineは日常会話のパターンを意味し、Negotiation skillは相手の理解度を類推するスキルや言いたいことを異なる言い方に変換する能力である。(石山赤北、 72-74)

スピーキングと並び日本人の不得意分野の代表格はリスニングである。リスニン

グは学校の授業の中であまり熱心に取り上げられていない。外国語を聞いてその内容を的確に理解することは、しゃべることと同様に容易なことではない。聞いた内容をそのままストレートに理解出来れば問題はないが、第二外国語である英語を母国語のようにストレートに理解するにはそれなりの訓練を要する。日本の英語教育の中では長らく、おそらく現在も総合的な会話教育に多く時間を割いているとは思われない。英語を話したり、聞いたりする時間が、他の文法や読解と比較して少ないので残念である。

リスニングの技能を教室で教授する上で最も重要なことは、はっきりとした目的を維持し、リスニングをすることの意味を理解させ、そして、学生に聞く準備させることが重要である。(Paul Wadden, 57)

なぜリスニングが必要なのか、何の為にを行うのか目的をはっきりさせることが重要である。そして、学生達にリスニングをさせる時にしっかりと心の準備をさせることもまた忘れてはならない。最終的にめざすゴールとは以下の通りである。

1. ネイティブ・スピーカーの英語を聞くことに自信をつけること。
2. 英語を聞き、スムーズに理解すること。
3. 誤解をした時の対処能力を向上させること。
4. リスニングにおいて、言語情報（ボトム・アップ）と非言語情報（トップ・ダウン）の両方の情報を使いこなせるようにすること。
5. リスニング中に予想と推論をすること。
6. 様々な会話についていけるようにすること。(Paul Wadden, 53)

多くの日本人は、とにかく人前で話すことに抵抗を示す傾向がある。ましてや、外国人の前で話すとなればなおさらである。それぞれの文化には、それぞれ独自の特徴があり、生き方や考え方にも大きく影響を及ぼす。

日本人は、個人ではなく集団の和を大切にする傾向がある。それは、幼少期から培われ、他の子供達と異なる行動や発言をすると、母親から叱責されることになる。いわゆる出る釘は打たれるということである。(Paul Wadden, 104)

皆と同じように振る舞うことが当たり前であり、そうしないと不自然である、と物心付いたころから教え込まれているので、心の底にインプットされているのであ

る。他の人と異なった意見を言うことには幾分抵抗を感じる。したがってあいまいな表現を用いることが多い。これが日本的なコミュニケーションのとり方であろう。最近の若者は比較的自由に意見を述べるようだが、まだまだ遠慮しているところがある。ここで我々が注意しなければならないことは、文化背景や国民性により、コミュニケーションの取り方には特徴があるということである。

ホール（1976年）は、ハイ・コンテクストとロー・コンテクストの二種類にコミュニケーションを分類した。ハイ・コンテクストのコミュニケーションは、情報の殆ど全てが物理的状态の中に存在するか、その人個人の中に内在するものであって、記号化された明確な形での伝達メッセージの中には内在しないとする。一方、ロー・コンテクストによるコミュニケーションでは、伝達すべき情報の大半が、明確な形での記号によって伝達される。アメリカ文化では比較的コンテクストが低い傾向があり、アジアの文化圏では高い傾向がある。ハイ・コンテクストによるコミュニケーションの特徴は、間接的であり、極めて回りくどい意志伝達法である。一方、ロー・コンテクストによるコミュニケーションは直接的かつ明快である。さらに、コミュニケーションは、言語によるコミュニケーションと非言語によるコミュニケーションとに大別することが出来る。実は言語による意思伝達法よりも、非言語による意思伝達法のほうが、遙かに多く使われていることはあまり知られてない。²（石井敏、54－58）

日本人のコミュニケーションの取り方を見ると、アジア系特有のハイ・コンテクストによる意思伝達法に当てはまることになる。と言うことは、言語によるメッセージ以上に、非言語によるメッセージを注視する必要があるのではなかろうか。では、ここで非言語によるメッセージには、具体的にどのような物があるか、説明していくことにしよう。

非言語メッセージの分類は、形態及び機能上困難であるが、ナップ（*Nonverbal Communication in Human Interaction*）の包括的 분류が理解しやすい。1）顔の表情、視線行動、手振り、身振り、姿勢などの身体伝達行動。2）体型、毛髪、皮膚等の身体的特徴。3）握る、撫でる、叩く等の接触行動。4）音声の特徴、笑い声、泣き声、咳、発話中の周辺言語（*Paralanguage*）。5）空間、距離、縄張りに関する近接空間論（*Proxemics*）。6）化粧品、服装、持ち物等の物品。7）家具、装飾品、光、温度等の環境要素の7種類である。（石井敏、95）

確かに最近の若者の行動パターンを観察してみると、一見かつての日本人と比較してかなり大胆になってきてはいるが、教室での彼らの行動パターンを観察してみると、やはり今までの日本人と同様アジア系特有であるハイ・コンテクストを中心とする意思伝達法に頼っている傾向が強いと思われる。人と違ったことをするのを非とする教育を幼少の頃から受け、人前で発言することが苦手な日本人にとって言語によるコミュニケーションよりも非言語によるコミュニケーションに比重を置くのである。

そこで、講義で学生のモチベーションを上げるには、彼らから発せられる非言語によるメッセージを読みとることと同時に、日本人特有の集団心理を鑑みる必要があると思われる。

大人数の授業で、先生と言うよりはむしろ学生達の間で相互作用させ、英語に対する反応を最大限に増幅させ、モチベーションを付けさせるには、ペア・ワークが効果的である。と言うのは、殆どの学生は、多くの学生の前で英語をしゃべりたくはないし、失敗して皆から責められるようなリスクは負いたくないのである。これは、恥ずかしさではなく、恐怖なのだ。ペアで作業を行うことにより、そのような恐怖を軽減させることが可能となる。(Paul Wadden, 43)

多くの学生が苦手とするスピーキングとリスニングを効果的に教授するには、方法論プラス彼らから発せられる言語はもとより、非言語によるメッセージの意味を解説し、出来るだけプレッシャーをかけないことが必要であろう。そうすることによって、彼らに強い動機付けを与えることが出来るのではなかろうか。

4. 異文化コミュニケーション、リーディングへの応用

講読の授業は専攻に関わらず、特に大学における英語教育の中では中心的な役割を担っている。実際、最近のリーディング教材は、文化、ビジネス、文学、科学技術等様々な分野をカバーしており、教科書選定の幅が広がっている。多くの学生の声を聞いてみると、講読の授業が特に好きと言うわけではないが、他の英語科目と比較すると、受け入れ易いと、好意的な見方をする者が少なくない。やはり、これは受験で出題される問題で、リーディングの占める割合が他の分野と比較して、高いことに起因しているのではなかろうか。受験で出題される可能性が高ければ、自ずとそれに力を入れて取り組まなければならない。読解問題の出来不出来が、合否に大きく影響することは否定出来まい。よって、英語の授業に於いて最も時間を割

いているのが、講読の授業であろう。好き、嫌いではなく一番慣れ親しんでいるのであろう。

我々は文章を読むときに、その内容を理解する為にある特有のプロセスを通して、認知するのである。今までの日常生活やメディアや経験から獲得した知識の蓄積から情報を選び出し、適切に整理活用するスキルが必要である。いわゆるトップ・ダウン・プロセスとボトム・アップ・プロセスと呼ばれる処理方法である。

文章を理解する処理方法は、二つの課程を通して行う。まずは全体像を上から見下ろすことと、全体像から見て特徴的な部分に焦点を当てて、そこから理解を深めるプロセスである。前者は、森全体を見渡すことであり、後者は、森の中にあるそれぞれ個々の木の中を調べることである。

具体的に説明すると、トップ・ダウン・プロセスは、学習者が文章の全体像を吸収することにより内容を理解することであり、ボトム・アップ・プロセスは、文章で使用される単語や節から文章の全体像を理解しようとする処理方法である。(Jeremy Harmer, 201)

人間は、読解をしていく課程に於いて、ボトム・アップ・プロセスとトップ・ダウン・プロセスの両方を駆使しながら理解していくのである。いくら多くの単語を知っていようが、文章全体を理解する能力が欠けていれば、正確に内容を捉えることは出来ない。フレキシブルな対応と選択及び実践出来るスキルを持ち合わせる事が重要である。つまり、両方のプロセスを自在に使える能力が必要不可欠なのである。(石山赤北、92)

読解力を身につける為にトップ・ダウン・プロセスとボトム・アップ・プロセスを磨き上げることが、リーディングの能力を高めることにつながるのであるが、学生に高いモチベーションを持たせるには、彼らが興味を抱き続けることが可能な教材を使用することが必要不可欠である。教科書の全体像を見て興味を抱けば、生徒のモチベーションが高まり、トップ・ダウン・プロセスの処理能力の改善に寄与するであろうし、教科書にちりばめられたキー・ワードやキー・フレーズに興味を抱けば、生徒のモチベーションは高まり、ボトム・アップ・プロセスの処理能力の改善に寄与するであろう。結果として、学生のリーディングへのモチベーションは増し、総合的に読解力の改善が大いに期待できるであろう。

そこで、キー・ワードとなりえるのがE.I.L. (English as International Language)ではなかろうか。英語を母国語とする国々アメリカ、イギリス、オーストラリアをInner Circleと言う、その人口総数は、三億二千万人から三億八千万人。英語を第

二外国語とする国々インド、フィリピン、シンガポール等をOuter Circleと言う、その人口総数は、一億五千万人から三億人。英語を外国語として広く勉強している国々中国、日本、ドイツをExpanding Circleと言う、その人口総数は、一億人から十億人と分類すると以下のようなことが分かる。³ (Sandra Lee McKay, 9-10)

- 1) E.I.L.として英語は世界的に見て、国際的にコミュニケーションを取る手段として使用されている。そして、多くの言語を使用する社会に於いて共通言語として広がりを見せている。
- 2) 国際的に通用する言語として、英語の使用はもはやInner Circle Countriesの文化をつなげるものではない。
- 3) 国際的な言語として地元感覚で使われている英語は、使われている国の文化にぴたりと当てはまっている。
- 4) 世界的に見て、E.I.L.の主な機能は、お互いの文化や考えを分かち合うことである。
(Sandra Lee McKay, 12)

確かに日本社会は、国際化が著しく進み英語の必要性は高まっている。英語がしゃべれて当たり前と言う社会的風潮は、言葉だけが一人歩きをして、全く現実性に欠けているのではなかろうか。学生達にモチベーションを与える為にはE.I.L.の現状をしっかりと理解させることが肝要ではなかろうか。同時に彼らに興味を抱かせる教材の使用が重要である。やはり、E.I.L.としての英語を教授するには、文化的な側面を全面に出した教材が妥当であろう。

自身の文化を反映し、他の文化とのつながりを持たせることが、異文化間の領域を広げることに寄与するであろう。それには、全ての文化の存在が、強調されなければならない。そして、最も重要なことは、自身の文化を知り、尊重することである。教員にとって気をつけなければならないことは、自身の文化に関して、固定観念を持ったり、他人の意見に流されないことである。

(Sandra Lee McKay, 100-129)

5. おわりに

本稿では、異文化コミュニケーションの手法が英語教育に応用することが可能かどうかライティング、スピーキングとリスニングそして、リーディングに絞り込んで論述してみた。英語教育の方法論を知ることは重要であり、どの手法をアプライするかはそれぞれの教員に選択権がある。それぞれの方法論には、良い面も悪い面もある。様々な社会環境の変化に伴い、日本の英語教育が曲がり角にさしかかっている事実を無視することはもはや出来ない。そこで見方を少し変えて、異文化コミュニケーションの手法を英語教育に役立たせることである。教育する上で我々が忘れてはいけないことは、我々は言語と非言語を駆使して、学生とコミュニケーションを取っていると言う事実である。特にハイ・コンテクストのコミュニケーションを多様する日本人にとって、ある意味言語以上に非言語によるコミュニケーションの重要性を認識する必要がある。

聞くことと非言語によるコミュニケーションは、相互につながりを持っている。我々は非言語を聞いているのである。言い換えると、我々は相手が言ったことの意味を理解するように、相手の語形変化、トーン、スピード、ペース、ジェスチャー、姿勢等の意味を理解するのである。我々は、言語をコミュニケーションの主なチャンネルとして重んずるが、実際は、80%－90%の情報交換を、他の方法で行っている。(Carmen F. Simons,65)

相手の文化背景を理解し、彼らに一番適切な教授法のヒントを探し出す上で、異文化コミュニケーションの手法を英語教育に応用することは、極めて意義のあることと言えないであろうか。表向きは、かつての日本人と比較すると、行動パターンが大きく変化している様に思えるが、実際教室で見る彼らは、ハイ・コンテクストのコミュニケーションに依存し、他人と異なる行動をすることを良しとしない日本人の典型的な行動パターンを示している。彼らの表向きの顔に惑わされず、的確な教授方法を実践する為にも、異文化コミュニケーションの手法を応用することのメリットは、益々高まっていくことであろう。

註

- 1 この文章の初出は、石山赤北『現代の英語科教育法』英宝社、2003である。
72.
- 2 この文章の初出は、石井敏『異文化コミュニケーション改訂版』有斐閣選書、
1999である。54－58.
- 3 この文章の初出は、Sandra Lee McKay, *Teaching English as an International Language*, 2002である。9－10.

引証資料

- 石井敏、他。『異文化コミュニケーション改訂版』。有斐閣選書、2001.51,95.
石山赤北、他『現代の英語科教育法』。英宝社、2003.72-74,92.
Carmen F. Simons, 他. *Transcultural Leadership, Empowering the Diverse Force*.
Gulf Publishing Company, 1993. 65.
David Nunan, *Second Language Teaching & Learning*. Heinle & Heinle Publishing
Company, 1999.272.
Jeremy Harmer, *English Language Teaching*. Pearson Education Limited, 2001.201.
Paul Wadden, *A Handbook for Teaching English at Japanese Colleges and
Universities*. Oxford University Press, 1993. 43,53,57,104.
Sandra Lee McKay, *Teaching English as an International Language*. Oxford
University Press, 12,100-129.